

石川県人の西洋音楽事始

坂本 麻実子

はじめに。

明治日本において、西洋音楽の最大の拠点、東京であった。東京には、文部省直轄の東京音楽学校をはじめ、私立の音楽学校や音楽塾が数多くあった。個人レッスンに応じてくれる音楽家たちも住んでいた。演奏会でも、楽譜や楽器を扱う店でも、東京と地方の落差は大きかった。そのため、東京には、全国から音楽家を目指して人が集まったが、成功する者はわずかであった。しかし、地方人は、東京で挫折したからと言って、おいそれとは帰郷できなかった。地方人にとって、上京とは、共同体からの離脱を意味しており、オール、オア、ナッシングの選択だったからである。西洋音楽のために上京した者は、一時的に帰省はしても、故郷に回帰するのは難しかった。一方、地元に残る者に西洋音楽を指導するのは、彼らから見れば、他国者であることが多かった。つまり、地方の西洋音楽の指導者は、東京で西洋音楽を学んだのち、未知の土地にやって来たのであった。したがって、明治日本の西洋音楽受容を地方レベルで検討するときは、上京組と地元組、そして他国者の西洋音楽指導者の動向に注目するのも一つの方法であろう。そこで、石川県人をモデルケースとして、地方人はいかにして西洋音楽と出会ったのかを考察する。

ところで、明治の地方人は、自分が所属する藩・府県と中央政府との関係が良好であったか否かによって明暗が分かれたが、石川県は、不遇をかこっていた。石川県は、明治5年(1872)の廃藩置県によって、金沢県(旧加賀国)と七尾県(旧能登国)が合併して生まれた県である。両県は、旧幕時代には金沢藩領であり、藩主前田家は、百万石の大大名で、外様ながら徳川将軍家とは婚姻関係もあった。しかし、幕末の金沢藩は、朝敵こそならなかったが、政治的な対応に遅れをとり、明治政府の下では主流から完全にはずれた。百万石を誇った「金沢」ではなく、加賀国の一郡にすぎない「石川」が県名になったのも、明治政府の旧金沢藩に対する冷遇のあらわれだと言う。旧金沢藩の政治的、経済的、社会的な没落は甚だしく、そのため、縁を伝って上京し、活路を切り開こうとする石川県人は少なくなかった⁽¹⁾。そのような上京組の一人、金沢藩の支藩である大聖寺藩出身の瓜生外吉(1857-1937、安政4-昭和12)は、築地の海軍兵学寮にはいった。その後、アメリカのアナポリス海軍兵学校に留学した外吉は、同じ留学生の永井繁子(1861-1928、文久1-昭和3)と出会った。繁子は、旧幕臣の娘であり、ニューヨーク州のヴァッサー・カレッジの音楽科で学んだ。帰国後、海軍エリート将校の外吉と、音楽取調掛(東京音楽学校の前身)のピアノ教師に採用された繁子は、結婚した。こうして、石川県人は、瓜生外吉夫人の繁子によって、東京に西洋音楽のチャンネルをもつことになった。

実際、繁子が在職した明治15年から26年までの間に、音楽取調掛・東京音楽学校で学んだ石川県人は4名もいて、入学の早い順に、小木とも、林繁、行山(林)すが、岩原(松本)愛子、である。当初、音楽取調掛は、本郷の文部省用地(現在の東京大学法文経1号館の場所)にあり、本郷は旧幕時代には前田家の上屋敷があった場所なので、上京した石川県人は、特別な感慨をもったかもしれない。小木ともは、音楽取調掛第2回の全科卒業生(明治20年2月卒)で、ピアノを学んだ。ともは、国産ピアニスト第1号となった幸田延の1級下のクラスである。林繁と行山すがは、明治17年9月から翌18年7月⁽²⁾までの1年間、石川県から唱歌の伝習のために音楽取調掛に派遣された。岩原愛子は、東京音楽学校専修部の第1回生(明治24年7月卒)で、ヴァイオリンと声楽を学び、卒業生総代になった。卒業後のともと愛子は、帰郷した形跡はないが、伝習を終えた繁とすがは、帰郷した。しかし、彼らは、

地元石川県では、全く忘れられてしまった。そこで、上京した石川県人の音楽人生を跡づけるとともに、地元の人々に西洋音楽を指導した石川県師範学校の音楽教員を調査し、石川県人の西洋音楽事始の様相を明らかにする。

1. 小木ともの場合

小木とも（友、トモ、友子という表記もある）は、明治15年（1882）4月、音楽取調掛に入学した。このときの入学許可者は17名であったが、明治20年2月に卒業したのは女子4名で、木村さく（東京府平民）、森とみ（東京府士族）、林蝶（東京府平民）、小木とも（石川県士族）であった（東京芸術大学百年史編集委員会1987: 225）。4名中3名までは東京府人であり、残り1名が石川県人のともであった。

ともが入学したのは、明治15年3月に採用された瓜生繁子を頼るように、翌4月である。ただし、ともは、万延元年（1860）生まれなので（東京芸術大学百年史編集委員会2003: 1557）、入学時には23歳（数え年）であり、繁子よりも1歳上である。同期のさくは慶応元年（1865）生まれ、蝶は慶応2年（1866）生まれ、とみは明治3年（1870）生まれであり、1級上の幸田延と遠山甲子は明治3年（1870）生まれ、市川道は明治元年（1868）生まれなので（東京芸術大学百年史編集委員会2003: 1557、1566、1569、1571、1576）（東京芸術大学百年史編集委員会1987: 37）、ともは、女生徒としては年かさの方であった。なお、蝶は、ともと卒業年は同じであるが、明治13年10月の最初の入学生の一であり（東京芸術大学百年史編集委員会1987: 37）、15年12月26日付で邦楽調査掛に採用されていた（東京芸術大学百年史編集委員会2003: 1570）。また、蝶は外国人教師のメーソンにピアノを学んでおり⁽³⁾、繁子のピアノのクラスは、さく、とみ、ともの3名が一緒であった。

ともの在学中、音楽取調掛は、4年制の音楽専門学校を目指して改革を進めており、ピアノについても、明治15年8月に次のようなカリキュラムを作った（東京芸術大学百年史編集委員会1987: 44-51）。

- 1年前期（1週9時間）：右手、左手、雙手練習。バイエル教本1番～64番。
- 1年後期（1週9時間）：雙手練習。バイエル教本65番～105番。
- 2年前期（1週9時間）：手指運用法、長音階練習等。
ウルバビ（ウルバツハ）教本72番～109番。
- 2年後期（1週9時間）：前期と同じ。ウルバビ教本110番～146番。
- 3年前期（1週8時間）：粧飾弾法、短音階。ウルバビ教本147番～165番。
- 3年後期（1週8時間）：粧飾弾法、歌曲練習等。ウルバビ教本166番～184番。
唱歌掛図中の歌曲。その他進行曲（マーチ）、連弾曲等。
- 4年前期（1週6時間）：半音階練習、歌曲練習等。ウルバビ教本175番～197番。
高等の学校用歌曲。
- 4年後期（1週6時間）：前期と同じ。ウルバビ教本198番～209番。
各種歌曲及び復習。

明治15年4月入学のともも、前記のカリキュラムに準じて、繁子から指導を受けたと考えられる。翌16年1月、音楽取調掛は女子の入学を禁じ（女子の入学の復活は明治20年3月であった）、その代わり、在学中の6名の女生徒を選抜し、見習生とした（三浦1991: 141）。その見習生が、幸田延、遠山甲子、市川道、木村さく、森とみ、そして小木ともであった。見習生となったともには、次の5つのピ

アノ演奏記録がある。

①明治17年(1884)2月。2年見習生後期試験

小木とも：「ヘールコロンビア」

(参考) 木村さく：「エルヒェンワルツ」

森 とみ：「コーラー」(ケーラー Köhler の作品の意か)、「ポルカ」

(東京芸術大学音楽取調掛研究班 1976: 355)

瓜生繁子編『進行曲集』には、「Hail Columbia March」という曲があり、ともが演奏した「ヘールコロ
ンビア」は同一曲かもしれない。それならば、ともは2年生ながら、3年後期の教材曲である進行曲
(マーチ)を弾いている。その他、後期試験には長音階が課され、「長音階嬰変ノ中」より出題された。

②明治17年(1884)10月9日。東京府外12県連合学事協会員参観日

小木とも：「ポルカ」(作曲者記載なし)

(東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 216)

学事協会の参観日、ともはポルカを演奏したが、同期のさく、とみは出演しなかった。ちなみに、
1級上からは、延と甲子が連弾で出演した(演奏曲記載なし)。

③明治18年(1885)1月17日。月次音楽演習会

小木とも、木村さく(連弾)：「ゼネラル、スミッス、マーチ」

(東京芸術大学音楽取調掛研究班 1976: 362)

今回は、ともはさくとの連弾で、マーチを演奏した。瓜生繁子編『進行曲集』には「Smith March」
という曲があり、ともとさくが演奏した「ゼネラル、スミッス、マーチ」は同一曲かもしれない。1級
上からは、延は「ノクチュールン」(トール作曲)、道は「ブリューメン、リーデ(花の歌)」(ランゲ
作曲)、甲子が「ウェディングマーチ」(メンデルスゾーン作曲)で出演した。全員が標題つきの小品を演
奏しており、ともがマーチやポルカを弾いているのとは比べると、やはり、一日の長がある。

④明治18年(1885)2月。3年見習生後期試験

小木とも：「スプリング・ソング」

(参考) 森 とみ：「グランドマーチ、ミリテル」(シューベルトの「軍隊行進曲」か)

木村さく：「メロジ シュブリーム」

(東京芸術大学音楽取調掛研究班 1976: 357)

明治18年2月、音楽取調掛は「音楽取調所」と改称し(ただし、同年12月には再び「音楽取調掛」
に戻った)、本郷から上野公園(現在の科学博物館の場所)へ移転した。3年見習生は、前期試験には、
「Scale Exercise & Octaves」、「Boccacir March」、「Janny Birds March」が課された(東京芸術大学音楽取調
掛研究班 1976: 356)。前期の演奏曲は、音階とオクターブ、マーチであったが、後期の演奏曲は、標題
つきの小品になった。ともが演奏した「スプリング、ソング」は、メンデルスゾーン作曲『無言歌集』

にある「春の歌」であろうか。その他、後期試験では「ゼロニー [チェルニー] 氏教則本」が課された。

⑤明治20年(1887)7月9日。音楽取調掛演奏会

木村作子、小木友子(連弾)：「輪回曲」(ベートーヴェン作曲)

(東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 228)

明治20年2月19日、ともは卒業したが⁽⁴⁾、なぜか、卒業演奏会には出演しなかった。卒業生名簿は、木村さく、森とみ、林蝶、小木友、の順で記載されており(東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 224)、これは席次順と思われるので、ともは最下位である。卒業演奏会では、首席のさくは、「ラ、チエーテレー」(メーエル作曲)を演奏した。とみは、箏曲「越後獅子」(共演者：幸田延、山勢松韻)を演奏した。さらに、とみはヴァイオリン、蝶はピアノで「セレネード」(シューベルト作曲)を合奏した。

卒業演奏会に欠席するとは、ピアノ人生には大きなダメージであるが、それでも、ともは、明治20年5月6日付で教職担当の授業補助として母校に残ることができた(東京芸術大学百年史編集委員会 2003: 1557、1588)。しかし、ともは在職が確認できるのは明治20年のみである。明治20年7月9日の演奏会は、明宮(のちの大正天皇)の臨席を仰いで行われた。当日、ピアノ演奏者と演奏曲は次のとおり。中島茂千代、大久保鈴子の連弾「好伴侶曲」(エフ、バイエル [バイエル] 作曲)。山田源一郎「エー、フラット、シンフホニー中踏舞曲體ノ部」(モザート [モーツァルト] 作曲)。林蝶子「セビラノ理髪工」(ロジニー [ロッシーニ] 作曲)。高木次雄、小出雷吉の連弾「軍人進行曲」(エフ、シューベルト作曲)。小出作之助「幻想曲」(イー、カーペンチーア作曲)。最後に、さく、ともは連弾「輪回曲」(ロンドの意か?。ベートーヴェン作曲)が登場した。御前演奏会とあって、精一杯、有名作曲家のピアノ曲を並べた感がある。

この明治20年7月9日の演奏会を最後に、ともは演奏活動は途絶える。『東京音楽学校一覽』(東京芸術大学附属図書館所蔵)の卒業生欄を通覧すると、明治22年度版には、小木ともは「洋行」とある。しかし、23年度版から25年度版までは氏名のみ記載である。26年度版から29年度版までは、小木ともは「未詳」と掲載されている。30年度版には、小木ともは「婚嫁」とあるが、翌31年度版には「死亡」となっている。ともは人生(享年40歳くらいか)の最後の10年間は、不明な点が多い。

2. 林繁、行山すがの場合

音楽取調掛は、明治17年(1884)4月、唱歌教育の実施に向けて、全国の府県の長宛に伝習生募集の案内を出した。申し込みは6月30日までとしたが、それに対して、石川県は、6月20日付で「石川県師範学校補助教員林繁(四一歳、士族)」の派遣を回答したが、さらに、8月30日付で「行山壽賀子」を追加した。(山住 1967: 162、165)。一つの県で、男女の伝習生を派遣するとは珍しいが、石川県側の史料として、『石川県学事報告』第1号(明治17年7、8月)には次のような記述がある。

井口織兄、石川郡野々市小学校準訓導林繁ノ兩名ハ、八月廿五日、本縣師範学校補助教員申付ラレタリ。(中略)同日、林繁ハ、音楽唱歌傳習ノ為メ、大凡一ケ年間、文部省音楽取調所ニ就キ研修申付ラレタリ。因ニ云フ、林繁妻行山壽賀子ハ、私費志願ヲ以テ、夫ト共ニ傳習ノタメ同行セリ。

(句読点は筆者。石川県 1981: 10-13)

林繁は、石川郡野々市小学校の準訓導であったが、明治17年8月25日付で石川県師範学校補助教員に任命され、同時に、音楽取調掛への派遣を命じられた。つまり、石川県が音楽取調掛に林繁の派遣を通知した6月20日の段階では、当人は、まだ、金沢市郊外の野々市小学校の教員であった。繁が石川県師範学校の補助教員に任じられたのは、石川県派遣の伝習生にふさわしい肩書を与えるためであろう。ところが、「林繁妻」の行山寿賀子（スガ、すがという表記もある）が「私費志願」し、夫の音楽唱歌伝習に同行すると言い出した。慌てて、石川県は、すかの追加派遣を8月30日付で音楽取調掛に通知した。すが自身は、教員でもなければ、師範学校卒業生でもない⁽⁵⁾。妻の一念で夫について行くと言うすかを、石川県は、繁と同じ音楽唱歌伝習生に仕立て、上京させた。実際、夫婦を派遣したことが、後日、石川県の唱歌教育の普及に役立つのである。

明治17年当時、林繁は41歳で、若くはなかった。しかし、繁には、雅楽と明清楽の素養があった。繁の履歴書によれば、明治3年7月に京都に行き、怜人蘭広道に入門して鳳蕭（笙）吹方の伝授を受け、同9年6月には金沢区彦三町の今井兼知方に住み込み、竜笛吹方、合奏法ならびに催馬楽、歌物、明清楽の合奏法の伝授を受けた。石川県は、林繁は年齢超過の者だが（音楽取調掛では、伝習生は16歳以上30歳以下の男または女としていた）、「其道二通セサル壮年者」よりは「若年来音楽執心ノ者」を派遣したいと説明し、音楽取調掛もそれを了承した（山住1967:162-163）。また、「私費志願」したすがも、『石川県学事報告』第7号（明治18年7、8月号）によれば、「金沢區留學費」によって派遣されたとあるので（石川県1981:418）、すがも、石川県派遣の伝習生としての体裁を整えたようである。

さて、音楽取調掛では、9月7日に、派遣伝習生たち14名に試験を行った。試験科目は、音声（唱歌）、読書、作文、数学であり、希望者は技芸、洋学も受験できた。林繁、行山すかの成績は表1のとおりである（山住1967:168）。

【表1】石川県派遣伝習生の音楽取調掛入学試験の成績

	音声(唱歌)	読書	作文	数学	合計点	技芸
林 繁	90	79	120	0	289	28.75
行山すが	88	0	0	0	88	16.25

備考：『唱歌教育成立過程の研究』より作成。

音声（唱歌）は平易だったようで⁽⁶⁾、繁も、すがも、良い成績である。読書と作文は、小学校の現職教員の繁は、まずまずの成績であるが、すかは零点である。すがには、そもそも学問を学ぶという経験がなかったのかもしれない。数学は、繁も、すがも、零点である。それだけに、両人は、技芸による加点を試みたようで、繁は笙、月琴、笛を演奏し、すかは月琴と蛇皮線を演奏した（山住1967:174）。（したがって、繁、すが夫妻には「明清楽」という共通の音楽があった。）その結果、繁の成績は3番に浮上し、すかの成績も13番となり、最下位を免れた。9月12日、繁は入学を許可されたが、すかは仮入学であった。しかし、すかはあきらめず、12月23日に本入学となった。

翌18年（1885）7月20日、音楽取調掛（当時は音楽取調所と称した）は、第1回の全科卒業生（幸田延、遠山甲子、市川道の3名）の卒業式と同時に、派遣伝習生たち20名の修了式を行った。そのため、卒業演奏会には、箏と胡弓の伴奏による唱歌3曲（「仰げば尊とし」「鏡なす」「太平曲」）を取り入

れた。箏と胡弓は伝習生にも担当させたが、残念ながら、繁とすがは選ばれなかった（東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 220）。それでも、卒業写真には、すがは瓜生繁子の左隣に写っている。在学中の小木ともも写っている（遠藤 1991 の第 12 図。頁数なし）。

『石川県学事報告』第 7 号（明治 18 年 7、8 月号）によれば、繁とすがは、8 月 11 日に金沢へ帰った。そして、東京で幼児保育の伝習を終えて帰郷した井口織兄とともに、8 月 27 日に石川県師範学校において音楽演習を行い、東京で学んだ成果を披露した。当日の様子は、次のように記述されている。

八月二十七日午後二時ヨリ、石川縣師範学校内ニ於テ楽器ノ試用ヲ行フ。唱歌ハ三十四曲ニシテ、風琴、琴、胡弓ノ合奏ナリ。當日會スルモノ、岩村本縣令ヲ始メ、収税長、各郡区長、県官、各県立学校教員、常置委員等亡處二百餘名ニシテ、本県ニ於テハ、唱歌ノ施行アリシハ此會ヲ以テ嚆矢トスレハ、大ニ聴衆ノ満足ヲ與ヘタリ。
(句読点は筆者。石川県 1981: 461)

明治 18 年 8 月 27 日の音楽演習会は、石川県における西洋音楽事始であり、知事をはじめ県の幹部、郡長、県立学校の教員や委員たちが多数来聴した。唱歌は 34 曲とあるので、『小学唱歌集』から抜粋したのだろう。唱歌の伴奏には、風琴（オルガン）、琴（箏）、胡弓を使用し、繁、すが、井口織兄が、適宜、演奏したのであろう。

ところが、この音楽演習を最後に、繁は公の場から姿を消し、以後、石川県の唱歌教育は、すが一人で担うことになる。『東京音楽学校一覽』明治 22 年度版には、林繁は「死亡」と記載されているが、それ以前に死亡したかもしれない。

さて、『石川県学事報告』によれば、「助手行山スカ」は、明治 19 年 11 月 7 月に初めて唱歌の出張指導を行っている。同年 6 月 1 日には、石川県師範学校でも、小学校女子教員を対象に、第 1 回の唱歌講習会が行われており、講師の名前は伝わっていないが、すがが担当したと見て良いだろう。もちろん、すがは、石川県師範学校の生徒や付属小学校の児童にも唱歌を指導したのであろうが、学校史には、すがの名を見いだせない（金沢大学教育学部付属小学校 1974）。次に、すがの出張指導と石川県師範学校の唱歌講習会の一覧を示す。

「行山すがの唱歌の出張指導」

明治 19 年 11 月 7 日。河北郡津幡小学校へ出張、翌日帰校。

『石川県学事報告』第 15 号（石川県 1983: 144）

同年 11 月 24 日。石川郡御鹽蔵小学校開校式に出張、翌日帰校。

『石川県学事報告』第 15 号（石川県 1983: 144）

同 21 年 3 月 21 日。河北郡へ音楽講習に出張、26 日帰校。

『石川県学事報告』第 23 号（石川県 1985: 14）

同 22 年 3 月 17 日。河北郡津幡で音楽講習会に出張、20 日帰校。

『石川県学事報告』第 29 号（石川県 1985: 266）

同 23 年 6 月 5 日。羽咋郡、鹿島郡に音楽講習に出張、13 日帰校。

『石川県学事報告』第 36 号（石川県 1986: 227）

「石川県師範学校の唱歌講習会」

明治 19 年 6 月 1 日より第 1 回講習会 『石川県学事報告』第 12 号（石川県 1982: 294）

同 20 年 8 月 1 日より第 2 回講習会 『石川県学事報告』第 19 号（石川県 1984: 20）

同 21 年 7 月 25 日より第 3 回講習会 『石川県学事報告』第 25 号（石川県 1985: 137）

明治 20 年以後、すがは、夫の遺志を継ぐかのように、「林」姓を名乗った。明治 22 年以後、すがは「林壽賀野」と称するようになった。なお、『東京音楽学校一覧』の卒業生欄を通覧すると、行山（林）すがは、明治 27 年まで石川県師範学校に勤務した。すがには、当初は、夫のための上京であり、音楽唱歌伝習であったかもしれない。しかし、思いがけず、すがは夫に代わり、石川県に唱歌教育の種を蒔いたのであった。

ところが、石川県師範学校は、すがを厚遇したとは言えない。『石川県学事報告』第 16 号（明治 20 年 1、2 月）によれば、「林スカ」は、明治 20 年 1 月 12 日付で石川県師範学校に「助教員」（月俸 7 円）として採用された（石川県 1983: 223）。この時点で、ようやく、石川県師範学校は、すがを教員の末席に加えたと考えられる。その後、『石川県学事報告』第 30 号（明治 22 年 5、6 月）によれば、明治 22 年 6 月 13 日付で、小学校教員の学力検定試験委員に任じられたすがの職名は、「助教諭試補」となっている（石川県 1985: 306）。しかし、すがは、正教員にはなれなかった。

3. 岩原愛子の場合

岩原愛子は、旧大聖寺藩士の岩原孝興の娘である。岩原家は、同じ大聖寺藩士である瓜生家とは、家族ぐるみのつきあいがあった。愛子の兄の謙三（1863-1936、文久 3 年 - 昭和 11 年）は、9 歳で上京し、明治 16 年に東京商船学校を卒業し、繁子の実兄である益田孝（1848 - 1937、嘉永元年 - 昭和 12 年）が社長をつとめる三井物産に入社し、以来、実業家として、茶人として、益田の薫陶を受けた。明治 5 年（1872）生まれの愛子も、瓜生家から東京音楽学校に通ったという（生田 2003: 169）。愛子の入学時期は確認できなかったが、明治 20 年 3 月に音楽取調掛は女子の入学を復活し、10 月には東京音楽学校として開校したので、それに合わせて愛子も入学したと考えられる。在学中の愛子には、次に示すように、ヴァイオリンと声楽の演奏記録が 7 つある。

①明治 21 年 7 月 7 日（1888）東京音楽学校音楽演奏会 於上野公園華族会館

二部合唱「夏の暁」

（演奏者：幸田延子、森富子、林蝶子、岩原愛子、宇野ふで子、長谷川兼子）

（三浦 1991: 217）

②明治 22 年（1889）7 月 6 日卒業演奏会 於上野公園華族会館

二部合唱「ゆめ」、「さらばや故郷」（メンデルスゾーン作曲、中村秋香作歌）

（高音：長谷川兼子、荒井楨子、中音：岩原愛子、瀬川作子）

ヴァイオリン合奏「ロマンス」（ルース作）

（ヴァイオリン：石岡得久子、岩原愛子、久間和嘉子、宮崎玉子、村松英子、

ピアノ：遠山甲子）

独唱「もり歌」（ヘルマンマリア作曲、中村秋香作歌）

（三浦 1991: 219 - 220）

愛子は、在校生として卒業演奏会に出演した。しかも、卒業生（山田源一郎、小出雷吉、高木次雄、

鷹野国蔵、以上男子4名)を差し置いて、愛子の独唱「もり歌」が生徒の演奏の最後を飾った。そして、愛子の独唱に続いて、繁子も「インビテーション・フホア・ゼ・ワルツ (舞踏への勧誘) (ウェーバー作曲)」を演奏し、花を添えた。

③明治23年(1890)某日大日本音楽会員演奏会 於東京音楽学校

ヴァイオリン独奏「ウイヒテル氏の教科書中ヨリ一課」

(東京芸術大学百年史編集委員会 1987: 395)

明治23年5月、東京音楽学校は、現在の東京芸術大学音楽学部の敷地に校舎を新築し、演奏会も、構内の奏楽堂で行うようになった。オーストリア人音楽家テルシャックによる参観記「日本東京における東京音楽学校」よれば、「岩原嬢ハ(玉ノ如キ美服ニ光ヲ放チ處女ノ常習トシテ物珍シケニ見回シタリトノ説アリ)勇気ヲ奮ヒ著明ナル音調ヲ発シ」という。着飾った愛子は、物珍しげに周囲を見回したあと、気合を入れ、ヴァイオリン教則本の中の1曲をおもむろに弾き始めたようである。

④明治23年(1890)12月23日第9回同好会

独唱「秋風」(シユミット作曲、中村秋香作歌)

(東京芸術大学百年史編集委員会 1990: 10)

⑤明治24年(1891)2月11日紀元節祝賀式

独唱「天津乙女」

(東京芸術大学百年史編集委員会 1990: 10)

⑥明治24年(1891)3月14日同好会

三重唱「ガルタケビヤンカルナ」(共演者：瀬川朔子、荒井楨子)

※イタリア語歌唱 (東京芸術大学百年史編集委員会 1990: 10)

岩原が同期の瀬川、荒井と組んだ3重唱「ガルタケビヤンカルナ」とは、シューベルト作曲のイタリア語による歌曲「4つのカンツォーネ」(D.688)の第3曲「見よ、月の白きを *Guarda che bianca luna*」であろう。愛子が、和詞洋曲ではなく、西洋歌曲を原語で歌うのは今回が初めてであり、当時としては画期的であった。

⑦明治24年(1891)7月11日卒業演奏会

女子卒業生8名によるヴァイオリン合奏「ミニユエットセント」

(岩原愛子 [独奏]、石岡得久子、瀬川朔子、根岸磯菜子、久間和嘉子、村松秀子、丸山登女子、荒井楨子)

(東京芸術大学百年史編集委員会 1990: 11)

愛子は、自分自身の卒業演奏会にはヴァイオリンで出演し、卒業生総代として謝辞を読んだ。卒業後、愛子は、7月13日付で教職担当として母校に採用されたが(東京芸術大学百年史編集委員会 2003: 1549)、間もなく、京都府高等女学校で3年間教職に就く。東京を離れたのは、東京音楽学校のオーストリア人

教師で、愛子が師事したディットリヒ Dittrich, Rudolf（明治21年～27年在職）からプロポーズを受け、困惑したからだと言う。ディットリヒの帰国後、東京に戻った愛子は、繁子の世話で松本源太郎に嫁ぎ、家庭の人となった（生田2003:168-171）。

4. 石川県師範学校の音楽教員たち

石川県が音楽取調掛に派遣した林繁の肩書が「石川県師範学校補助教員」であることに示されるように、石川県師範学校は、石川県における西洋音楽の最も重要な拠点であった。師範学校の音楽教員は、生徒、児童、そして現職教員を指導するだけでなく、演奏活動も行って、石川県音楽界の発展に尽くすことが期待された⁽⁷⁾。明治時代、石川県師範学校の音楽教員は、表2のとおりである。

【表2】石川県師範学校の音楽教員の変遷

氏名	音楽歴	職名	在職期間	出身
林 繁	音楽取調掛伝習生 明治18年7月修了	補助教員	明治17年～？	石川県士族
行山(林)すが	音楽取調掛伝習生 明治18年7月修了	助教論試補	明治20年～明治27年	石川県士族
大島サダ	東京音楽学校師範部 明治26年卒	助教論	明治26年～明治33年	群馬県士族
新清次郎	東京音楽学校師範部 明治34年卒	教論	明治35年～明治38年	福岡県士族
村岡重任	東京音楽学校舊甲種 師範科明治37年卒	教論	明治39年～明治40年	宮崎県士族
大西安世	東京音楽学校本科 器楽部明治41年卒	教論	明治41年～昭和8年	千葉県士族

備考：『石川県学事報告』、『東京音楽学校一覧』より作成。

石川県師範学校は、音楽取調掛伝習生の林繁、行山（林）すがの後任には、東京音楽学校卒業生を採用した。しかし、石川県の派遣伝習生である林夫妻は石川県出身であるが、東京音楽学校卒業生の大島サダ、新清次郎、村岡重任、大西安世は、全員、石川県外の出身者である。しかも、大島は7年、新は3年、村岡は1年で離任したので、地元十分に馴染んだとは言えなかった。それに対して、明治41年に赴任し、25年間も在職した大西安世は、石川県音楽界の功労者として、特に、オーケストラの育ての親として、地元の人々に尊敬された（石川県音楽文化協会1985:52-53）。

大西安世は、千葉県出身であり、明治37年に東京音楽学校予科に入学し、41年に本科器楽部を卒業した。大西は、1年留年したので、卒業年は、大正時代に作曲家として活躍する山田耕筰や本居長世と同じである。しかし、山田と本居が在学中から楽才を示し、卒業演奏会にも出演したのに比べれば⁽⁸⁾、大西は本科では目立たず、音楽教員の道を選んだ。石川県師範学校に赴任した大西は、学内外で精力的に西洋音楽を指導した。昭和6年に石川県師範学校に入学した八十田歳雄によれば、大西は、芸術家タ

イブの厳しい教官であった。1年生の声乐と楽典では、ドイツ音名で教えるので、ちんぷんかんぷんの生徒がいた。2年生のピアノでは、「音を間違えれば当然の様に手を叩かれ」、「手の基本の形が悪いと言って、手の甲の上に一銭銅貨を置いて弾かされた」ので、「どうしても練習できなかつた者は、手の指に包帯を巻いて一時的に難をまぬがれた」と言う（八十田 1980: 27-28）。このようにして、大西は学生を鍛え上げていったが、その大西でさえ、金沢で音楽教員として終わろうとは考えなかつたのである。昭和8年8月14日、大西は、送別音楽会を開催して労をねぎらってくれた金沢を去ると、台湾へ渡つた。そして、台北高等学校、高等女学校の講師をしながら、台北オーケストラソサエティの指揮者となった。台湾出身の木村（旧姓般若）初代（文芸評論家の埴谷雄高の姉。東京音楽学校本科昭和2年卒）によれば、台北には、明治以来、東京音楽学校卒業生が割合に多く住み、音楽教育も充実しており、内地から来た演奏者は、耳の肥えた台湾の聴衆をあなどれなかつたと言う（東京芸術大学百年史編集委員会 2003: 1495）。そのような台湾の地に、大西は、音楽人生の最後を賭けたのであつた。

5. 明治の石川県人と西洋音楽の関係

音楽取調掛・東京音楽学校のピアノ教師の瓜生繁子は、石川県人の妻であつたので、さっそく、西洋音楽を学ぶために上京した石川県人がいた。しかし、音楽取調掛で学んだ小木ともも、東京音楽学校で学んだ岩原愛子も、優秀ではあつたが、プロの音楽家として活動しなかつた。音楽取調掛伝習生の行山（林）すがは、同志である夫の林繁亡き後、地元で唱歌教育に奮闘したが、正教員にはなれなかつた。もし、上京した女性たちが男性であつたなら、卒業後も長く音楽活動を続け、地元からも認められたであろうし、石川県の西洋音楽も、もっと違った展開になっていたかもしれないと想像するのは、行き過ぎであろうか。一方、地元の人々は、石川県外の出身で石川県師範学校に赴任した音楽教員たちから、東京音楽学校仕込みの西洋音楽を学んだ。しかし、石川県師範学校の音楽教員たちは、遅かれ早かれ、金沢を去るのであつた。金沢市内では、石川県師範学校の他にも、石川県高等女学校やプロテスタント系の北陸女学校で音楽教育を行っていたが、地元への影響力は石川県師範学校には及ばなかつた。第四高等学校の生徒も、西洋音楽への関心は今一つであつた。金沢は北陸随一の学芸都市であるが、地方の学芸都市でも、高等学校や高等師範学校、プロテスタント系女学校が積極的な音楽活動を行い、地元の師範学校や公立高等女学校の音楽活動を上回るほどだつた仙台（第二高等学校、宮城女学校を擁す）や広島（広島高等師範学校、広島女学校を擁す）の状況（坂本 1997）と比べると、金沢は振わなかつた。旧幕時代の金沢は、芝居や遊芸の盛んな城下町であつただけに、明治時代の金沢において、西洋音楽の進展が鈍かつたのは、幕末から明治にかけての金沢藩の凋落が石川県人の痛手となつていたことと無関係ではないだろう。

注.

- (1) 上京した石川県人では、旧金沢藩士の高峰讓吉（タカジアスターゼを発明した世界的化学者）や桜井錠二（東大教授、理化学研究所の創設者）が有名であるが、十字屋という楽器店も、能登の漁師出身の倉田繁太郎が経営していた。倉田は、海軍の試験に失敗し、漁師の性で身投げにも失敗した揚げ句、銀座でキリスト教書籍を扱っていた十字屋で働き始め、やがて店を任されると、音楽専門店にした（太田 1989: 81-82）。瓜生繁子も、明治32年（1899）にピアノ楽譜『進行曲集』を十字屋から出版した（坂本 2001）。
- (2) したがって、明治17年9月から翌18年7月までは、音楽取調掛には、小木とも、林繁、行山すがと、石川県人が3人も学んでいた。

- (3) 明治15年1月30、31日の音楽演習会において、林蝶は、30日には「独弾曲」(曲目記載なし)、31日には「三人合弾」(共演者：千村筆、吉田キサ。曲目記載なし)を演奏した(東京芸術大学百年史編集委員会1987:199)。
- (4) 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第1巻にある第2回生の卒業写真を見ると、少々ぼやけているが、最前列中央の瓜生繁子の左隣にいる細面の女性が、ともと思われる(写真の部13頁)。洋装といい、すわったときの手の組み方といい、繁子に倣っているのが興味深い。
- (5) 参考までに、群馬県も5月24日付で三須としという女性の派遣を通知したが、としは「県立女学校教諭兼幼稚園保姆」であった(山住1967:162)。
- (6) 音楽取調掛では、試験の唱歌を未修生用と既修生用に分けたが、大多数は未修生だったらしい(山住1967:167)。
- (7) 明治36年10月には、西洋音楽の普及と研究を目的として、石川県音楽研究会が発足し、事務所を石川県師範学校内に置いた(三浦1991:364-365)。
- (8) 卒業演奏会の演奏曲は、山田耕筰は独唱「菩提樹」(シューベルト作曲)、弦楽四重奏「ヴァリエーション」(ハイドン作曲。共演者：山井基清、澤邊眞、大塚淳)、本居はピアノ独奏「ヴァリエーション」(ヘンセルト作曲)である(東京芸術大学百年史編集委員会1990:242)。

参考文献

生田澄江

2003『舞踏への勧誘 日本最初の女子留学生永井繁子の生涯』東京：文芸社

石川県 [編]

1981『石川県史資料 近代篇』(8) 金沢：石川県

1982『石川県史資料 近代篇』(9) 金沢：石川県

1983『石川県史資料 近代篇』(10) 金沢：石川県

1984『石川県史資料 近代篇』(11) 金沢：石川県

1985『石川県史資料 近代篇』(12) 金沢：石川県

1986『石川県史資料 近代篇』(13) 金沢：石川県

石川県音楽文化協会 [編]

1985『石川県音楽史』金沢：石川県音楽文化協会

遠藤宏

1991『明治音楽史考』(音楽教育史文献・資料叢書5) 東京：大空社

原本の出版は1948、東京：有朋堂

太田愛人

1989『開化の築地・民権の銀座 築地バンドの人びと』東京：築地書館

金沢大学教育学部附属小学校

1974『金沢大学教育学部附属小学校百年史』金沢：金沢大学教育学部附属小学校

坂本麻実子

1997「明治末期の地方ピアノ界とプロテスタント系女学校—仙台と広島の事例から—」

『桐朋学園大学研究紀要』第24集、27-44頁、11月。

2001「マーチを弾く女学生たち—近代日本ピアノ界の女子アマチュアの考察—」

『桐朋学園大学研究紀要』第27集、37-53頁、10月。

【徳丸吉彦先生古稀記念論文集】

東京芸術大学音楽取調掛研究班 [編]

1976 『音楽教育成立への軌跡』 東京：音楽之友社

東京芸術大学百年史編集委員会 [編]

1987 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』 第1巻 東京：音楽之友社

1990 『東京芸術大学百年史 演奏会篇』 第1巻 東京：音楽之友社

2003 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』 第2巻 東京：音楽之友社

三浦俊三郎

1991 『本邦洋楽変遷史』（音楽教育史文献・資料叢書2） 東京：大空社

原本の出版は1931、東京：日東書院

八十田歳雄

1980 『石川音楽教育体験記』 金沢：北国出版社

山住正巳

1967 『唱歌教育成立過程の研究』 東京：東京大学出版会